

大阪の余裕が生んだ  
アートの世界も今は

KEYワード  
第67回

連続テレビ小説『あさが来た』が好評であったことで、東京一極集中が進むあまりに自虐的な近年の大阪人も、多少、郷土に自信をとり戻したかの様子である。私などは美術史を専攻するものとして、ドラマに座敷の床の間が出てくると、舞台となった幕末明治大正の大阪で愛された絵画は何だったかと気になってしかたがない。

富商の床の間に、おめでたく誰でも分かる画題を描いた四条派などの絵が掛かっているのは普通だが、大阪人が愛した絵画ならば、もうひとつ掛かっているもおかしくないのは間違いなく南画(文人画)であろう。

本来は中国の高級官僚や知識人である“文人”が、山水や墨竹墨蘭などを、職業としてではなく教養の一種、余技として描いた絵画である。江戸時代なかばに本格的に日本に入り、池大雅、与謝蕪村が初期の大成者となった。とりわけ大阪は、本拠と言えほど南画(文人画)の盛んな土地であった。

江戸時代に大阪で活躍した画人は、福原五岳、木村兼葎堂、十時梅厓、浜田杏堂、岡田米山人、岡田半江など枚挙にいとまがない。というのも、南画(文人画)は、知的好奇心に満ちて教養高い町人たちが学ぶべき中国文化の本流であるし、中国古典への教養がないと愉しめない美術であることが、逆に彼らの創作意欲を高めるとともに、町人や武士など身分の枠を超えて、仲間たちと余暇を過ごすのに適した高級な趣味でもあった。さらに大阪の経済力が、お手本となる中国からの作品輸入を可能とし、仕事を離れて、あこがれの“文人”の世界に遊ぶ余裕を生み出したのである。

そして、川端康成が愛蔵した国宝「凍雲節雪図」を描いた浦上玉堂や、田能村竹田らも大阪を訪れて拠点に活躍するなど、大阪は彼らにとって居心地のよい土地であり、中国趣味の濃い煎茶ともむすびついて、大阪を特色づける文化として発展する。



矢野橋村(夏菊) 大正後期 (個人蔵)

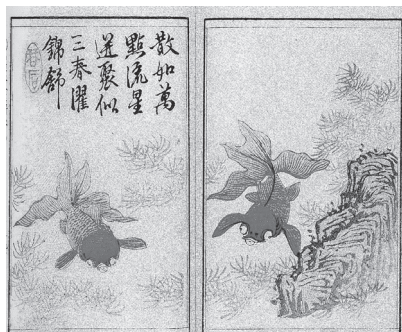
近代も大阪は南画(文人画)が盛んで、森琴石、姫島竹外や矢野橋村らが活躍した。『あさが来た』では、日本最初の女子大学設立へ主人公は邁進するが、大阪の美術界では、明治17(1884)年に、実業家・樋口三郎兵衛によって、東京美術学校(1889年開校)よりも早く道修町に浪華画学校が開校し、森琴石(1843~1921)らが南画(文人画)を教える課程が設けられた。

大正時代では、大正9(1920)年に、現在の「日展」の源流であり全国規模の公募展であった第2回帝国美術院展を評した石井柏亭が、会場を飾る日本画の入選作品が、大阪から入選した美人画とともに「南画が殆ど大阪で持切られて居る」と評している。

そんな南画(文人画)だが、現代の大阪は、それが自分たちの歴史であることを論じる余裕もなく、日々の生活に汲々としているようだ。自分たちの先人が築いてくれた文化的蓄積も知らずに、というか、それに関心も抱かずはどうやって未来を語るができるのだろうか。

現在、宝塚市の清荒神清澄寺・鉄斎美術館の所蔵品を中心に、兵庫県立美術館で生誕180年記念「富岡鉄斎-近代への架け橋-展」(~5月8日)が開催されている。名作や大作が並んだ、すばらしい回顧展である。富岡鉄斎(1837~1924)は京都の出身だが、大鳥神社(堺市西区)の神官をつとめるなど大阪とも関係があった。明治42(1909)年、大阪心斎橋筋2丁目時代の高島屋で誕生した高島屋美術部のためには額を揮毫し、高島屋は、なんども鉄斎の展覧会を開催している。

今年は、与謝蕪村の生誕300年でもあるので、蕪村、鉄斎など展覧会をハシゴすれば、南画(文人画)三昧できるわけだが、こうした都市文化の記憶が、いまの大阪では薄らぎ忘れられているのは、まことにもってびっくりボンで、残念至極でおます。



森琴石「墨香画譜」より 明治13(1880)年 (個人蔵)

筆者プロフィール

橋爪 節也 はしづめ せつや

大阪大学総合学術博物館前館長/大学院文学研究科教授。1958年、大阪市生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室学芸員を18年間つとめ現職。専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念木村兼葎堂一なにわ 知の巨人」「北野恒富展」「没後80年記念佐伯祐三展」などに携わる。編著に「大大阪イメージ増殖するマンモス/モダン都市の幻像-」(創元社)など。